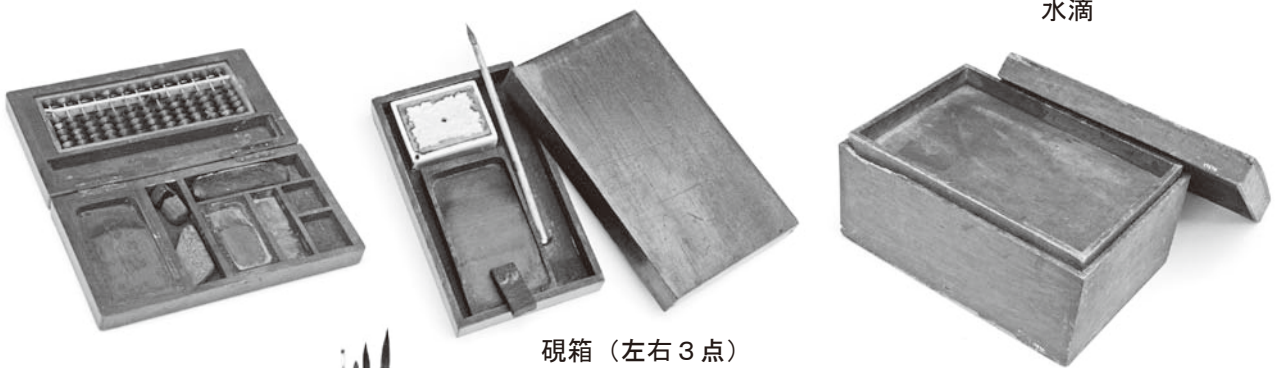


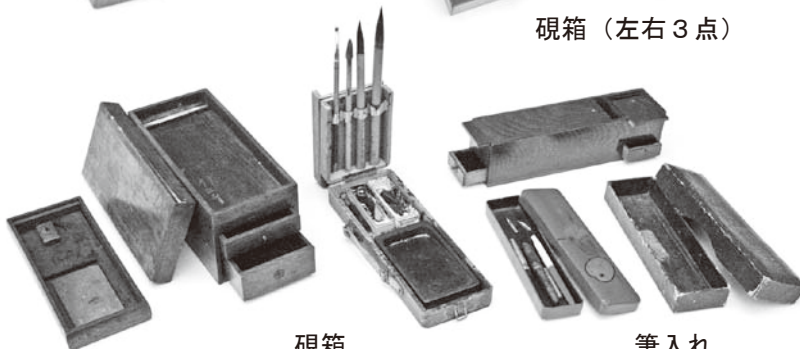


矢立

水滴



硯箱 (左右3点)



硯箱

筆入れ

石板

寄贈資料の中から

文房具

今回は、資料の中から文房具を紹介します。

文房とは書斎を意味し、そこで使われる道具のなかでもとくに、筆、墨、硯、紙は文房四宝とよばれ、重要視されてきました。

矢立は携帯用の筆入れで、帯に差して持ち運びます。江戸時代に広く用いられましたが、大正時代まで使われたところもみられます。筆筒と墨壺が一体のものと、別のものがあります。墨壺に詰めた毛や綿に墨を含ませることで、傾けてもこぼれないようにしています。

硯箱は硯、水滴、墨、筆などを一つに納めるものです。平安時代後期に発達し、室町時代から近世にかけて、多様な硯箱が考案されました。写真中央のものは江戸時代以降に多くみられる形ですが、他にも引出し付きや折りたたみ式など、いろいろなものがあります。中央左の資料は、縦9cm横17cmの箱に、黒墨と朱墨

用の小さな硯が二面入っており、蓋の裏には算盤がはめ込まれています。中央右の硯箱は、新聞紙半分ほどの大きさがあります。箱の上にある懸子が硯箱で、下の箱に紙などが入れられるようになっています。箱裏に「明治二年己巳八月吉日求是」との墨書があります。

水滴は、硯に水を注すための容器です。大きさや意匠はさまざまで、陶磁器や金属製のものがあります。

筆入れは大正時代頃から普及しました。この頃からノートや鉛筆が流通し、昭和30年以降に筆入れは発達しました。写真のものは左が紙製で、他は木製です。

石板は、粘板岩を薄い板状にして木枠をつけた、半紙半分ほどの大きさをした黒板のようなものです。両面が使い、ろうせきで筆記し、布などで拭き取って消します。明治初めから昭和初めまで普及し、主に小学校で一年生が字の練習や計算をする際に使用されました。

駿河湾の漁

川上 貢さんの漁話

南部から来た漁師たち

昭和25年から昭和50年頃までの約四半世紀、^{おせぎ}大瀬崎の瀬洞漁場^{せぼら}で^{だいぼうあみ}大謀網(1)と呼ばれた大型定置網を操業していた人たちは、地元の江梨ではなく沼津市からも遠く離れた岩手県南部地方の漁師たちであった。岩手県は明治時代末期に大謀網が始められた地域で、漁業の先進地であった。いつ頃から南部地方の漁師たちが大瀬へ出稼ぎにやってきたのかははっきりしたことはわかっていないが、若松では昭和元年に始まった大謀網に従事していた人たちが南部地方の漁師たちであったことから、遅くとも昭和時代初期には南部からの漁師たちの往来が確立していたようである。川上さんが行っていた大謀網に南部地方の漁師たちが来るようになった経緯についてもはっきりしたことはわからないが、大謀網の経営者である川上さんの叔父が前経営者から引き継いだ時に南部の漁師たちも一緒に紹介されたようである。

大謀網を操業するには30人近くの人員が必要となる。経営者である川上さんの叔父はこの操業には加わらないため、川上さん以外は南部の漁師たちということになる。船頭にあたる人をオオダイボウと呼び、副船頭にあたる人をコダイボウと呼ぶ。そして、残りは若い衆となる。若い衆は経営者が直接集めるのではなく、オオダイボウ・コダイボウが岩手県宮古市周辺の漁村から集めてくる。川上さんは経営者側の人間であるが、大謀網の操業にも参加し、南部の漁師たちの相談事や依頼を聞いたり、経営者から託された漁を行う上での資材や生活必需品を届けるといった橋渡し役を担っていた。

大謀網を始めた時には川上さんも叔父も漁に関する知識はほとんどなく、オオダイボウ・コダイボウが中心となって瀬洞漁場で大謀網を設置するための準備が行われた。一般的な大謀網では網を固定するために碇となる土俵を繋げて海に落としていかなければならないが、瀬洞漁場では片側を大瀬崎の陸に繋げて網を固定するオカバリという手法が取られた。これはオオダイボウの指示による。必要な資材も南部の漁師たちが大瀬にやってきてから調べ上げ注文をした。資材が届いてからも若い衆に指図し、必要なものを作っていた。前号で触れたように土俵は江梨の人たちを雇って石詰めや棧俵付けを行っていたが、その他のガラスダマ(写真1)やガワダケ(写真2)などは全て南部の漁師たちの手による。

南部の漁師たちの主導で行われていたため、様々な呼び名にも色濃く現れている。「大謀網」という呼び名

自体も実際の網名とは違うが、そのように呼んでいる。また、網を揚げる作業を「網起こし」と呼んでいるが、これも南部の漁師たちが使っていた言葉だという。

南部の漁師たちは一軒の宿舎で寝食を共にし、共同生活を行っていた。どのような生活を行っていたのであろうか。次号では、南部の漁師たちの当時の生活を川上さんに振り返っていただく。

(話：川上 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市今沢在住)

(1)大謀網と呼ばれているが、川上さんが従事していた定置網の正式な網名は落網である。落網は箱網と登網^{おとしあみ}がつけられ、登網を通して箱網に落ちた魚は逃げられない構造である。一方、大謀網とは落網よりも古い定置網であり、箱網がないため常に見張りを立てて魚が入ると口を塞ぐ必要があった。

<参考文献>

1977 金田禎之『日本漁具・漁法図説』成山堂書店

2002 沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編『沼津市史 資料編 民俗』沼津市

2006 沼津市歴史民俗資料館編『漁具の記憶～奥駿河湾の漁法と漁具～』沼津市歴史民俗資料館



写真1：ガラスダマに付着したフジツボの除去
(昭和32年頃 川上 貢氏 撮影)



写真2：ガワダケ作り
(昭和32年頃 川上 貢氏 撮影)

資料館の調査ノートから②

株式会社岡村造船所 岡村社長に聞く

木造船とFRP

現在、船大工道具を扱った次期企画展の準備に取り組んでいます。先日、松崎町にある、株式会社岡村造船所の岡村社長にお話を伺うことができました。

岡村造船所さんは、沼津市民にはなじみの深い観光船「ちどり」を造られた会社でもあります。現在の主軸はFRP製のカッター艇ですが、木造船の製造技術を保つため「船舶工芸」の分野を立ち上げ、博物館やテーマパークなどの展示用木造船も手掛けられています。今回は、岡村社長に伺ったお話の一部をご紹介します。

*



FRP船が並ぶ漁港

現在、実用船としての木造船製造は0%。発注がまず来ない。実用の木造船を造ったのは、昭和55年くらいに40tの観光船を造ったのが最後。

昔は船といえば木造船だった。観光船でもカヌーでもカッター艇でも、なんでも木造だった。昭和52～55年くらいまで、外洋向けのカッター艇も木造で造っていた。素材は天城産のケヤキ。骨はヒノキで造った。

1970年ごろにFRPが出始めてから、年々発注の割合が変わってきた。たとえば木造船4隻の注文だったものが、次の注文では木造3隻：FRP1隻に…と変化していった。昭和56年以降は実用の木造船の発注は入らなくなった。観光船「ちどり」も同様で、最初は木造で造っていたがFRPに変わった。

木造船はまず、材料を吟味するのが大変だ。木造船を造るには、木の性質を知らなければ造れない。職人がひとつひとつの道具を使いこなせるようにならなければ、次のステップへ行けない。職人を育てるのに10年はまずかかる。FRPは5年もあれば造船技術を覚えられる。木造船も、洋型なら線図（ライン図・設計図）が読めれば造船は可能だが、和船はまず木の性質を知り、ノミ・カンナを使いこなせなければ造れない。和

船は長年の蓄積がないと造船できない。木造船は宮大工に近い。だからFRPが入ってきたら急速にすたれた。



原海岸の木造船

木造船は5年たったら修理が必要。船の寿命は10～15年、最大でも20年。FRPなら20～30年はもつし、その間基本的に修理もいらない。

FRPが出始めた当初は、木造船を知っている人からはFRPより木造船のほうが、どっしりとした乗り心地が良いといわれていた。また、FRPだと風に流されやすいということも聞いた。今は木造船を知らない人のほうが多い。FRPが軽いなら（木造船に戻そうということではなく）重く改良すればいい、となった。

（木造船の表面にFRPを張った船もあるらしいが、との問いに答えて）ある。それは技術的な問題ではなく、水密を保つため。もう古くなった木造船をまだ使っていた場合、上にFRPを張りつけて、水密を保つ。（「水密」＝機械・装置などで、隙間などから水が漏れないようになっている状態。『広辞苑第五版』より）



FRPを張ったとみられる古い木造船

（昭和30～40年頃の松崎について）当時、松崎には船大工を20～30人雇っている大きな造船所が3つあった。そういう造船所は、中に船釘鍛冶や鉄関係の人もいた。あるいは、外に船釘専門の鍛冶がいて、造船所と契約でやっていた人もあった。

松崎・田子・安良里では大きい船を造っていた。明治～大正がピークで、大型船の造船は昭和30～40年ごろが最後。大きい木造船の場合は、外洋向けなので弁財船（弁才船）が大半だった。

*

一見効率の悪い木造船の製造技術を、なぜ今も保ち続けようとなさっているのか。きっと木造船ならではの魅力があるはず。木造船を造る魅力、乗る魅力についても追跡調査をしていこうと思っています。

魚見のある風景③

昨年度の企画展のために収集した地先漁場の資料の中から魚見が写されている写真を紹介します。

左上の写真は、内浦三津の松濤館を経営されていた相磯勇さんからいただいたものです。今は鉄筋コンクリートの建物に建替えられていますが、古い木造の松濤館の頃、昭和30年代に中央に写っている白い三階建ての新館を建てた頃の写真だそうです。

現在では、平らに削られて水族館の駐車場になっている裏山の中腹には、岡部長景さんの別荘で、画家の梅原龍三郎が滞在したことで知られる東瀛荘^{とうえいそう}の瓦屋根も写されています。中央には大きな松の木が立っています。その松の木の右端の幹の中ほどを拡大したのが下の写真です。駕籠のような建物が乗っています。

枝を利用しているようですが、斜めの筋交いのようなものがありますので、片方は枝、もう片方は幹にくくりつけ、筋交いで補強した根太を作りその上に床を張り、側面の下部は板壁、上部は簾のようなもので囲い、その上に切妻に板の屋根を掛けています。一坪もない狭い小屋のようです。

さらによく見ると松の幹に沿って梯子が掛けられて



います。よく見えませんが、松の根元近くにもう一つ小屋が作られています。写真には写されていませんが、右側には、網小屋があります。手前の海水浴場は、建切網漁のクブセ（久伏）網戸であり、突端が網船の待機場所でした。三津長浜両村寄合の時は重寺村の家の前に向けて建切ました。



資料館からのお知らせ

歴民講座を開催しました

8月25日(日)に歴民講座「山本勘助を追う～沼津に残されたその足跡」を、講師に平山優さんをお迎えして、市立図書館視聴覚ホールで開催しました。

現在、群馬県安中市の真下家で所蔵する山本菅助関係文書を、代々伝えてきたことが明らかとなった高崎藩士の山本家は、明治期に沼津に移住しました。現在、同家で所蔵する文書には、山本菅助の子孫の動向が記され、「甲陽軍鑑」に登場する山本勘助が古文書に記された菅助と同一人物であることが確実視されるにいたりました。

会場には、武田家の第十六世当主の武田邦信氏も見えられ、山本勘助の子孫である故山本弘昭さんの家族との対面も実現しました。



挨拶する武田邦信さんと山本勝子さん

企画展の開催について

平成25年11月2日(土)から17日(日)まで、御用邸記念公園を会場に開催される「松籙の宴」のイベントの一環として2階展示室で「白隠禅画展」を開催します。

沼津市歴史民俗資料館だより

2013.9.25 発行 Vol.38 No.2 (通巻199号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

